

---

# バカと男娘《オトコ》と召喚獣

広地 永久

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと男娘オトコと召喚獣

### 【Nコード】

N6799W

### 【作者名】

広地 永久

### 【あらすじ】

明久と家族（兄弟）のような関係の男娘の子、『冊原 鈴音』。

彼女はチビで男らしくて（顔も男の子で）正義感があって、そしてバカオトコだった。

バカな男娘オトコ、鈴音君が原作メンバーとFクラスでがんばって生きます（字違いにあらず）。

優子目覚めるパターン（笑）

## プロローグ（前書き）

どうも始めまして！！

バカテスデオリ主ってはじめてかもですね……。

サブ小説になると思いますが、がんばります！！

9巻に登場するリンネ君と名前がかぶったりしますが（ネタバレ自重中）です。

## プロローグ

「、……ん、りん？ 鈴音君？」

夢と現実の間が一番リラックスしている状態のこの時間。  
誰かが俺の体をゆさゆさと揺らす。うう、まだ春休みなのに……。  
もうちよつと寝かせるよな……？

「りんっ、起きな、朝だよ？」

揺さぶりが大きくなる。チツ、だから寝かせるって……。

「ん……にゃっ……！」

「ぼべらッ!？」

寝ぼけていたからなのか、俺の右手が無意識のうちにほぼ全力で揺さぶっている相手を殴る。すると、なにか悲鳴みたいなのが聞こえた。

「……ありっ？ アキ、何でそんなところでひっくり返ってんだ？」

「りんが殴り飛ばしたからだよ……。まあいいや、今日から学校だから、着替えてリビングに来なよ。もう朝ごはん っっていても簡単なものだけど、出来てるから」

「おう、さんきゅ」

アキが腰の辺りをさすりながら部屋から出て行く。そういや今日から学校だったんだっけ。すっかり忘れてた。

寝相の悪さのせいかはただけてしまっているパジャマを少し直してから洗面所へ行き、歯磨きや洗顔を済ませていったん部屋に戻る。制服に着替えてリビングに行くと、アキがうとうとしながら待っていた。

「おーいアキ、アキが寝てどうすんだよ？」

「……ふえ？ ああゴメン、ちょっとうとうとしてた」

椅子に座り、朝食を食べる。やっぱりいつ食べてもあきの飯は美味いよな。

「ねえりん。ずっと思ってたんだけど、なんでりんって女子なのにさ、男子用の制服着てるんだっけ？」

「うん？ えーっとね、なんでだっけか？ ああそうだ、『スースーしてるし動きにくいから』だよ」

「……そんなんでいいのかな？」

……。それは全く考えた事なかった。元々スカートは嫌いだけど。

「とりあえず、その辺は学園長も気にしてなかったみたいだし。いいんじゃないね？」

「度もそのせいで一部の人からはホントに男の子だと思われてるみたいだよ。男に娘って書いて『男娘<sup>オトコ</sup>』っていう新種の性別だって言

「つてる人もいるみたいだし」

え？ そうなの？ それは初耳だ。男娘か……。  
まあその変はあんまり気にしてないし、悪口ってわけでもなさそうだし。

「そーなのか。ところでアキ、今何時？」

「うん？ えっとね、九時だけど」

そっか、九時か。

ちよつとまで？ 九時？

九時 遅刻

新学期早々遅刻 印象最悪

「アキ！ 遅刻だよ！ 早く行くぞー！」

「じ、時間間違えてたー！」

一体どう時間を間違えたら九時に……。  
そんな疑問はさておき、俺等は慌てて学校に向かう羽目になった。

「は、早くしろアキ！ 鉄人に見つかったら一環の終わりだ！」

「終わりも何も振り分け試験の結果渡してくれるの鉄人じゃなかったっけ？ ……ていうか、速すぎ、りん」

あれ？ そうだっけか？

なんて思いつつ学校の正面玄関に向かって疾走していると、突然ドスの利いた声に呼び止められた。

「……遅刻だぞ、吉井、冊原」

「っ、てつじ」にむら先生」

「さりげなく英語みたいな呼び方で誤魔化そうとするな冊原。第一俺の名前はてつじじゃないぞ」

……やっぱりいたか憎き鉄人め……。

「貴様はもう少しおとなしくしようとは思わんのか？ 男子の制服を着ている事や性格にとやかく言う気はないが、せめて観察処分者にならないようにして欲しかった」

「でも僕はあの時僕がやった事を間違いだつたとは思いません、自分の意志を貫いたままでです」

「……そうか。ほら吉井に冊原、これを受け取れ」

ふう、と鉄人は一度短く息を吐き出し、俺とアキに封筒を差し出してきた。

無論、二つの封筒には『冊原 鈴音』『吉井 明久』と、大きく名前が書いてある。中身は振り分け試験の結果、つまりクラス名だ。

「二人ともよく聞け」

「はい？ なんですか？」

「全く、双子みたいだな……。今だから言うが、二人の事を去年一年間見てきて、『もしかしたらこいつ等はバカなんじゃないか？』と思っていたんだ」

「あはは。先生も変な事を考えますね」

二人で見事にハモリながら封筒を開けていく。これ、なかなか開けづらいな……。

アキにやってもらおうとアキの方を見ると、あっちもあっちで苦戦していた。

「だが、先生は振り分け試験の結果を見て自分の間違いに気がついたよ」

なんだ、そうならそうと早く言ってくれば良いのに。これで『鉄人』と、さらに『節穴』なんてあだ名を付けられずに済んだんだから、いい話だと思う。

「貴様らは 正真正銘のバカだ」

『吉井明久 Fクラス』

『冊原鈴音 Fクラス』

「ば、バカなっ!? 先生! 俺、化学と現国、かなり良いセン行つてたと思っただけだ!!」

「ああ、確かに科学と現代国語は200点前後取れていたみたいだったが、他は全部破滅的だったぞ? 特に英語なんて……0点だったからな」

「ウソだああああああつ!!」

「……ドンマイ、りん」

かくして俺らのこの学園での最低クラスで過ごす一年間は、最低な形で始まる事になった。

あとで聞いた所、俺は英語において基本的な、初歩的な、そして根本的なミスを犯していたらしい。

## プロローグ（後書き）

たぶん前書きでバカテストやります。鈴音の回答は基本永久が現実リアルでやっちまった間違いになると思います《笑》

ご感想ご意見とかメチャメチャ待ってます！

## 鈴音のプロフィール（前書き）

りん君の簡単なプロフィールです

## 鈴音のプロフィール

名前 サクハラ 冊原 リンネ 鈴音

性別 女

年齢 16

身長 149cm

一人称 俺時々僕

主なあだ名  
冊原、りん君、鈴音、りん。たまに名前を間違われ、スズネとか呼ばれる。

容姿  
男の子。俺とか言ってるもんだから「女の子だよ、俺」なんて言っても信じてもらえない。  
黄金色の瞳、艶やかな黒髪に若干茶色がかった髪が混じっている。  
髪型はサラサラのショートカット。  
本人、身長が伸びないのを気にしている模様。  
美波よりペツタンコ、女性の体つきじゃない。体型に関してはそこ

まで気にしていないらしい。  
針金体型。

#### 性格

自由奔放、活発でちょっと子供じみていて、それでいて男らしい性格。元気で身軽、運動神経はかなりの物。喧嘩は強い（雄二と互角程度）が、明久に負けず劣らずのバカ。誰に対してとか関係なく、あるワードを聞くとブチギレ、制御不能となる。ガラスのハートと胃袋（濃硫酸でも溶けないの意）の持ち主。

恋愛沙汰には鈍感。

#### 備考

- ・ 明久と幼馴染み、むしろ家族的关系
- ・ 観察処分者
- ・ 男子から男子として扱われているため、FFF団の制裁の対象となっている。
- ・ 化学、現国それぞれ200点位。だがしかし、他は破滅的で振り分け試験では総合得点ピッタリ800点だったらしい。
- ・ 因みに英語は零点だったらしい。

召喚獣装備：黒いツナギに白い木刀。

特技：運動全般、国語的教科（言うなれば文系）、化学、ゲーム、歌

弱点：勉強、虫

その他：女子からモテている……らしい。

## 鈴音のプロフィール（後書き）

ご意見ご感想心よりお待ちしております！

## 第一問 バカと男娘とFクラス（前書き）

不定期 バカテスト

第一問 英語

以下の英文を和訳しなさい

Here's a letter from China.

姫路瑞希 の答え

ここに中国からの手紙があります。

担任のコメント

姫路さんにとってこれは1+1レベルの問題でしたね。正解です。

吉井明久 の答え

チナから

担任のコメント

後で英語の先生と一緒に勉強しましょう。

冊原鈴音 の答え

へレにチナからのレッテルがある。

担任のコメント

へレってなんですか、チナって誰ですか、そしてなぜレッテルなんですか。

吉井君と一緒に後でゆっくり勉強しましょう。

## 第一問 バカと男娘とFクラス

「うおうつ！？ なんなんだこの教室……」

「そーだね……、普通の教室の五倍位あるんじゃない？ ココ」

三階に足を踏み入れると、一瞬驚いてしまっ程巨大な教室の姿が見えた。

高級ホテルのロビーのような教室に、リクライニングシート、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫 e t r …… これだけの設備があるなんて、Aクラスの人達だけじゃえんだよ……。

そして、本来黒板があるはずの場所に設置されているプラズマディスプレイには、先生とおぼしき美人の女性と、代表 霧島翔子さんが映っていた。

「つと、遅刻してんのにこんな所いちゃ駄目だよな。行くぞ、アキ」

「え？ あ、うん」

Aクラスを去り、Bクラス横を通り、Cクラスを過ぎ…… クラスのランクが落ちるのに比例するように、教室の設備や広さがランクダウンしていく。なんか廃れていってる気がする……。

そして、Fクラス。

「うおうつ！？ なんなんだこの教室……」

「そーだね……」

さつきと同じ言葉が口からこぼれるが、状況は全く違っていた。鎖が錆び、ひび割れた木製のプレート、いかにもギシギシ言いそうなドア、割れたのを無理矢理ガムテープやセロテープで留めた窓ガラス……テープがベタベタはっつけられているせいで中の様子は伺えないが、悲惨だっことは十分想像出来る。

「な、なんだか緊張するね……」

「二重の意味でな……」

変な人や怖い人や痛い事してくる人やイタい人はいないだろうか、大丈夫だろうか……。きつと今、アキも同じ事を考えている事だろう。

「大丈夫、大丈夫。僕等ならきつと平気さ……ね？」

ジコアンジ他己暗示じこあんじ……あれ？ 「じこあんじ」ってポ モンの技でなかったっけ？

「ヨツシャじゃアキ、運命の扉を開くんだっ……」

「カッコいい事言ってるように聞こえるけど、これ人生のジャツジだよな……よしっ……無事でありますように！」

ガラツと音をたて、予想外な程に軽くドアが開く。  
そして、

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れこのウジ虫共」

「うるせえクソ虫」

「ち、ちょっとりんっ!？」

あ、先生に言っちゃまった……。前ケンカをよくしてた頃、自分からぶっかけることは滅多に無かったけど、ぶっかけられたケンカは普通に買ってたから……。つい癖が……!

恐る恐る教卓の前にたたずむ背が高くてタテガミ頭で文月学園ココの制服をきたせ

「雄二、そこで一体何やってるの?」

アキが先生 否、雄二に問い掛ける。

「あん? 先生がまだ来てなかったから、なんとなく立ってみただ」

「……ったく、驚かせんなよな」

「一応このクラスの代表だし、ここに立っていても別段問題は無いんだけどな」

ふうん……。って、雄二がこのクラスの代表者なのか。コイツがねえ……。つまり、雄二を動かせばこのクラスも動くってワケだ。いいじゃんか、そーゆーの……

「鈴音、そんなにドス黒い笑みを浮かべてると、かなり怖いぞ。特にその容姿とのギャップが」

「何か言ったカナ？ ユウジ君」

「いや、何でもねえ」

ボソリ、と一瞬スイッチがなんたらかんたら……とか言っていたような気がするけど、きつと空耳だろう。

「うーん。それにしてもこの教室、酷いね……」

「そうだよな。特にAクラスを見てきた後だと……」

廊下側の窓ガラスと同じようにガラスは割れ、畳は腐り、卓袱台の脚は折れ……落書きに至っては探さないことの方が無理だ。

「なんだ、お前等も敵情観察に行ってきたのか？」

「え？ 一体なんの話？」

「いや、分からないなら別にそれでもいい」

敵情観察って、一体なんの事なんだ？

「えーっと……そこを通してもらえますか？」

「ほわっ!？」

突然の声に驚き……何だか今日は驚くことが多い気がする……。とにかく、ふりかえると冴えないサラリーマン風のオッサンが底に立っていた。見かけからして、今度こそ本物の先生だろう。

「あ……すみません」

「それと、席について貰えると嬉しいのですが……。HRを始めたので」

「了解ス」

「わかりました」

「うーっす」

俺等は各々席につき、あぐらをかく。……そう、あぐらをかく。椅子がないって、辛いよな……個人的に和室は好きだけど。くつろげるし。

「えー、おはようございます。私がこのクラスの担任、福原 慎です。よろしく願います」

チョークが無いのか、先生は言葉だけで自己紹介を済ませる。あ、なんだか設備が無さすぎて虚しく思えてきた……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 何か不備があれば申し出てください」

先生の言葉により、約50人の生徒達が一齐に自分の卓袱台と座布団を確認しはじめる。斬新なシステム、かなあ……？

「せんせー、俺の座布団に綿が殆ど入ってないんですけど」

クラスメイトの誰かが『不備』を申し出る。

「我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚がポッキリおれてまーす」

「支給されたクラス用の木工ボンドで頑張ってください」

不備を申し出るって、直すために申し出るんじゃないのか……？

「センセセンセ、俺のセットだけ『冊原 鈴音用』って書いてあつて、皆のより若干ミニマムに作られてるんですけど ……？」

無論、これは俺の声。

「体の小さい冊原く 冊原さんのための特注品らしいです」

「フツザけんなやゴルア ツー！」

誰がちびだッ！！ チビだけど……っ！ 俺は認めん、こんな陰湿なイジメ認めんからなああっ！！

「まつ、まあいいじゃんりんっ！ 結局どこも壊れてない新品なものを貰えたんだしっ！！ ねっ！？」

「うが っ！！ 納得いかねー！ ……結構××って事気にしてんのに……」

「あー、えー。取り敢えず、自己紹介を始めてしまいませんか。まずは、冊原く さんから」

……先生、自己紹介は落ち着いてやらないと大体は失敗するの知  
つて俺を落ち着かせるために俺からしやがったな……まあ、い  
いや。

俺は前に出て、自己紹介を始めることにした。

**第一問 バカと男娘とFクラス（後書き）**

中途半端に終わっててごめんなさい。

ご意見感想ご質問お待ちしてます

因みに鈴音君の解答はとわのリアル失敗問題をいじったものです。  
英語と数学苦手です。

## 第二問　バカ等と男娘と自己紹介

教卓に軽く手をつき、自己紹介を始める。

「ども、こんにちは。冊原さくはら 鈴音りんねです。男子用の制服着てるし、こんなナリ、性格してますが、これでも『男に娘と書いて男娘です』

あれ？ そーじゃなくて、『男娘』……」

まさか、もしかしてあいつか？ 実際『あいつ』の方を見るとにやりと可愛らしい顔を悪い笑みでいっぱいになっている。こういうのを、『小悪魔の微笑み』って言うべきだろうか？

「とりあえずいいや。特技は歌とか運動で、苦手なものはあえて言いません。あ、あと、知ってる人は知ってると思うけど俺に対して『禁句』を言わないように。言った奴はどうなるか分からないから……先に謝つとく、ごめんなさい。　　こんなかんじでいいのか？」

「はい、ありがとうございます。次は木下さ　君」

先生、俺と秀吉の君とさん、思いつきり入れ替えちゃってるよ。

そんなことは置いといて、俺と入れ替わりで去年からのクラスメイト秀吉が立ち上がる。秀吉は独特な言葉遣いで美少女、さらに演劇部のホープと特徴満点だ。みんなには優しいのに、なぜか俺だけには今みたいになっちゃうかい出てきたり、かと思ったらいきなりやさしくなったり。これもひとつの特徴とっていいのかな？ 彼は、ちよっと変わってるけど俺の親友の一人だ。

「ワシは木下 秀吉じゃ。演劇部に属しておる。鈴は男娘<sup>スス</sup>じゃが、わしはれっきとした『第三の性秀吉』なのじゃ……って、違うのじやー！ ワシは『もしくは美少女』……ではない！ さては鈴じゃな！ さっきはワシが悪かったのじゃー！ だからワシが『男』だつてことを、違ッ くないのじゃ……」

「……はい、ありがとうございました。次は」

トボトボと帰ってくる秀吉。そういえば確か一年の時に俺の名前を『スズネ』と間違えて、それから秀吉だけは俺のことをスズって呼ぶようになったんだっけか。一瞬ど忘れしてた。

「鈴、酷いのじゃ……」

「お互い様って奴だろ？ 秀吉だって特技の声真似で俺の自己紹介  
改変してたし」

「うぐ……っ。鈴とて声帯模写が特技なのは同じじゃろくに……皆  
鈴の改変自己紹介を信じてしまったのじゃ」

確かに周りの声を拾ってみると、『あの人がかの有名な美少女、  
秀吉か……』とか『木下は俺の嫁』なんて声が聞こえてきた。

『冊原ってぱつと見シヨタでじっくり見ると男だよな……』とい  
う声は聞かなかつたことにしよう。

「はは、悪かつたな。でも声真似つつつても秀吉ほどじゃないと思  
うけど」

「ワシは演劇部に入っておるからのう……ああ、自己紹介はきかん  
でよいのか？」

「？ それもそうだな」

秀吉に言われ、前に向き直る。……？ 自分から言ってきたのに、何で秀吉はこっちを見たままなんだ？

「 趣味と特技は吉井を殴る事です 」

「だれっ！？ そんなピンポイントかつ危険な思想を抱いているのはっ！！」

俺が秀吉と話しこんでいる間に、コントが繰り広げられていたようだ。

そのあとは、ムツツリーニや他の人たちなど、淡々と自己紹介が終わっていく。

お？ 今度はアキの番みたいだ。

「コホンッ。えーっと、吉井 明久です。皆さん是非気軽に僕のことを『明久』って呼んでくださいね ……あれ？」

アキが首をかしげながら俺の隣に戻ってくる。いつもアキと暮らしているからこそ分かる俺だけど、もしもあの時声を重ねていなかったら……うええ……想像するだけでも最悪だ。

と、その時。

ガラッ

「「「!?!?!」」」

「あ、あの……遅れて、すいま、せん……」

一人の少女、いや俺から見たら女性というべきか……が、上がった息を抑えようと胸に手を当てながら入ってくる。

その女性は……

「みーちゃんっ!?!」

「ふえっ? ……!! りん君!?!」

彼女は、紛れもなく小学校の頃の友達、そして学年一、二を争う才女、姫路 瑞希こと、『みーちゃん』だった。

「おや? 姫路さんと冊原君は知り合いだったのですか?」

知り合いも何も、小学校の時にかなり仲のよかった友達だ。忘れるわけがない。この学校に来て会う機会はほとんどなかったけど……。俺と仲良しってことは、無論アキとも仲良し……といたいところだけど、なぜかあの頃のみーちゃんはアキの近くに行く顔を赤くしながら嫌がり……そしてそのうち俺にもあまり近付いて来てくれなくなった。

「とりあえず姫路さん、自己紹介をお願いします」

「は、はいっ!! 姫路 瑞希といます。よろしく願いますっ!?!」

ぺこりと頭を下げるみーちゃん。ふわふわの髪の毛一緒に動いて、ウサギみたいで女の俺から見てもかなりかわいい。かわいいんだけど、

「あ、あの〜姫路さん」

「っ、なんですか？」

一人のクラスメイトが話しかける。

「なんでこんなトコＦクラスにいるんですか？」

「え、えっとそれはその……」

みーちゃんはクラスメイトの問いかけに困ったように口ごもる。少し言いづらい事だからなのかは分からないけど、彼女がＦクラスにいるのは仕方ない事だ。

だって、彼女はテスト中に高熱を出して倒れてしまったのだから。それを聞いたクラスメイトバカたちは、納得すると同時に次々と言いつきをします。

『そっいや、俺も熱（の問題）のせいで』

『あれはムズかったよなー』

『弟が事故って』

『黙れ一人っ子』

『前の晩かの』』

『『『クロスクロスクロス』』』

『ゴメンうそ』』

バカ達のトンネルをくぐってこちらへと歩いてくるみーちゃん。  
体の方は大丈夫なのか……？

「みーちゃん」

「り、りん君……」

「体の方は大丈夫なのか？ 姫路」

「ユウジイイイイイツ！！！！」

アキ、頭を抱えて悶えるなんて、そんなに悔しい事があったのか？  
多分雄二関連だと思っけど。

「はい、まだ本調子って訳ではないですけど……」

「そっか、良かった。でも気を付けろ、自分の体は大切にしなきゃ  
ダメだぞ？」

「りんが言えることじゃないと思うんだけど」

うん？ そんなのは無視だ、ムシムシ！！

「ありがとうございますりん君。あと、あの頃はごめんなさい。私



と、先生が教卓をたたいてこっちに向かって注意してきた。

「ほらほら、少し静かに」

バキィツ！ バラバラ

見事に机が粉碎された。

机が粉々、粉々ってどんな状況だよ！？ どんだけひど（ry

「……机を変えてくるので、『静かに』待っていてくださいね」

先生が机を取りに外に出て、みーちゃんが空いてる席に向かったのを見計らって、アキと一緒に雄二に詰め寄る。

「……ねえ雄二、ちょっと話があるんだけど」

俺等はそのまま雄二を廊下へと連れ出した。

第二問 バカ等と男娘と自己紹介（後書き）

ご意見感想そのたもろもろお待ちしてますっ！！

### 第三問 バカと代表と二人の火種（前書き）

やーどもども永久です。

すみませんでした、遅れました。

所詮ギャグ的な存在の人間が調子に乗ってがんばったところ、全身大火傷しました。そんな駄文でよければ、どうぞ。

### 第三問 バカと代表と二人の火種

「……で、話って一体なんなんだ？ それも二人して」

雄二が俺等に問う。まあそりゃそうだよな、先生が出て行っただと思っただけに呼び出されたんだし。しかも何の打ち合わせもしてなかった二人に同時に、さ？

「多分僕とりんが言いたい事は同じなんだけど……」

「単刀直入に言う。試召戦争、仕掛けようぜ？ 相手は……そう、Aクラスなんてのはどうだ？」

「ちょッ、りん！！ ちゃんと段階を踏んで」

「いんだよ。代表、回りくどいのは嫌いだし」

それに、きちんと言っていると長くなるっつーか……。先生来たら困るし。

「……。理由はなんだ？ お前らが勉強してまで設備を手に入れたいなんて事はないだろうし」

「え、えつとそれは……！」

アキが目線で『りん、ヘルプヘルプ』なんて訴えてくる。  
いや、別に隠す事じゃないと思うんだけど。

「みーちゃんのタメだよ」

「えええっ!? りん、それを言わないように助けを求めたのに!  
! 包み隠さず言っちゃうの?」

「みー、姫路の為か。それなら納得できるな。大方鈴音は『大切な友達の為』、明久が『憧れの人の為』ってトコか?」

「まあそんなトコだな。ほらアキ、男の子だろ? 泣かないの」

「さすが『元』神童だな。俺等が何でみーちゃんのために動いてるのかしっかり把握してる。」

……隣でさめざめと泣いているアキに対して、ちよつと反省。

「みーちゃん、体弱いだろ? それなのにFクラスなんていう設備環境共に最悪な所にいたら、もつと体悪くしちゃうと思うんだ。だから、頼む」

しっかりと頭を下げ、表現できる中で精一杯の気持ちをつづける。

たった一人のために、たくさんの人を動かす事になるから。

負けてしまえば、いろいろな人に迷惑を掛けてしまうから。

そしてその責任は、多分雄二がとらなくてはいけなくなってしまう  
うと思うから。

大切な親友ともだちのために、大切な悪友ガチに頭を下げる。

たとえ動かない人がいたとしても、俺がそいつの分動けばいい。

迷惑を掛けた責任は、ちゃんと話して俺がとる。

「僕からも、お願いします」

アキも同じように頭を下げる。きっと気持ちは一緒だろう。  
昔っから双子みたいだねって言われてたからなあ……。

「……ったく、お前等って奴は」

「……いいの？」

軽いため息と共にこぼれた言葉に対して、俺等は思わず顔を上げてしまう。

「さすがにそこまで頼まれちゃあ、な？」

「ありがと雄二ー！！ いつもはただの腹黒男だけど、たまにはいい奴になるじゃないかー！！」

「アキ、多分それ一言余計だ」

「それに」

「「??」」

雄二が明久の言葉に怒らないな。珍しい。それになんか複雑な表

情してるし。

「俺は世の中は学力が全てじゃないって、証明したいしな。……っと、先生きたみたいだな、教室入るぞ」

「「？ うん」」

世の中は学力が全てじゃないことを証明したいって、一体どういう事だ？

とりあえず教室に戻り、席に着く。すると程なくして教室に新しい中古の教卓を持った先生が入ってきた。……うん？ 『新しい中古の教卓』って、矛盾してるな。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「須川 亮です。趣味は」

ボーっとして頬づえをつきながら右耳から左耳に自己紹介をトネルさせる。

耳に入ってくるだけで脳で処理がされてないけど、大した問題じゃないよな。

さっき雄二が言っていたこと。それがどうも気になる。

何か、過去にあったような、そんな雰囲気だった。

しかも、Aクラスだって言ったのに、拒否しなかった。勉強だけが全てじゃないって事を証明するならBクラスに勝つだけでも充分なのに。

これはきつとAクラスに関係があるって

「。 。 ず、鈴？」

「え？」

「どうしたのじゃ呆けおつて。目も虚ろじゃったし、具合の悪いようなら保健室に行った方が……」

「ああ、ゴメン。ちっとボーっとしてたわ」

どうやらあまりに一人の世界に入りすぎて秀吉の目には具合が悪くように映ったみたいだ。

なんかアキ曰く俺って一人で考え事しすぎると目を開けたまま意識が飛んでる様に見えるらしい。自分ではそんなつもりないんだけどなあ。

『何回心配させたら気が済むのさっ!!』って怒らせたこともあったっけ。

「ならよいが、雄二の自己紹介が始まるみたいじゃぞ？」

「おう」

教壇に立つ『そいつ』は、貫禄があつて、威厳まであるように見えた。いつものふざけた様子の欠片かけらさえ見せない『そいつ』は、雄二であつて雄二でない他の誰かに見える。

「坂本君は、Fクラスの代表でしたよね？」

福原先生の問いに、鷹揚たかたかにうなづく雄二。

代表……と言っても、Fクラスバカの集まりの代表である事は決して自慢になる事ではないのに、彼は威厳あふれる態度で、そして自信に満ちた

表情で自己紹介を始めた。

「Fクラス代表坂本 雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

まずはクラスの反応を見る為か、当たり障りのない言葉を選んだみたいだな。まあ、普通自己紹介って言ったらこうなるのは当たり前だけ。

「さて、みんなにひとつ聞きたい」

自己紹介の中でその生徒から質問をされるのが不思議だったのか、話し声が止み、皆『？』と言った感じの表情で一齐に雄二の方を見つめた。

時に、悪友<sup>ダチ</sup>の皆さん。雄二の雰囲気「さて、」と言った瞬間から微妙に変わったのはお気づきかな？

目線でアキや秀吉、ムツツリー二と確認しあう。返ってきた答えはどれも同じ。そう、この瞬間を持って、雄二は『代表』から『詐欺師』になった。

詐欺師雄二は教室内の各所に視線を映し出す。うん、楽しそうだから騙されてみるとしよう。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台（俺の場合はミニマムな卓袱台）。

雄二の視線が変わる度、俺等も変わった先へと動かす。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸置いて、雄二は静かに告げる。

「不満はないか？」

『『『大ありじゃあああああっ！！』』』

二年Fクラス生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として、Fクラス生徒の一人として、大いに問題意識を持っている」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからつて、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『Aクラスだつて同じ学費なのに！』

「俺だつてみんなと同じ年齢なのに！こんな設備酷すぎる！！」

「若干謎なのが一人いるが……そんなお前らに、代表として、もっとも手っ取り早くもっとも合理的な手段としての案を提げる」

これから戦友となるであろう仲間達（他女子三名）に野性味満点の笑顔を見せ、

「 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表坂本雄二は、戦争の引き金を引いた。

### 第三問 バカと代表と二人の火種（後書き）

うん、やっとここまで来たね、まだまだ先が長い!!

ご意見ご感想コロコロよりコロコロよりおまちしてあーす!!

第四問 男娘と代表と勝てる理由へワケ（前書き）

不定期！ バカテスト 第二問《世界史》

問 四大悲劇と呼ばれるシェイクスピアの戯曲を全て挙げなさい

姫路瑞希 の答え

『？ ハムレット ？リア王 ？オセロ ？マクベス』

教師 のコメント

正解です。ロミオとジュリエットは四大悲劇に入りませんが、よく知ってましたね。

冊原鈴音 の答え

『？リバーシ ？ロミオとシ デレラ ？リア充 ？ハム』

教師 のコメント

なんかいろいろと違うと思います。  
リア充は別に悲劇ではないですし。

ゲスト 広地永久 の答え

『四大悲劇ではなくて三大悲劇だと思います、黄色い双子がかわいそうです』

教師 のコメント

一体何の話をしているんでしょうか？

#### 第四問 男娘と代表と勝てる理由へワケ

『 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う』

雄二のこの一言により、クラスは一層騒々しくなった。

無謀。無駄。幻想。非現実的、無理、不可能……、そんなような言葉なら、いくらでも出てくる。

俺だって正直こんなの無謀な挑戦だと思う。最下位が最上位に勝つ事など、到底不可能だから。

だけど、これを、この状況を、可能や現実的などそういった言葉に変えることの出来る『要素』が、このクラスにはある 正確には、『いる』。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ』

『瑞希ちゃんがいれば何もいらな(殴)ぐぶあっ!?!?』

……最後の奴が俺から拳プレゼンをもらったという事はさて置き、クラスの奴等はやはり無理だ無謀だと嘆いている。そんな事ないのになあ……。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺等が勝たせてみせる」

『でも……』

「そつだよな、鈴音？」

「もちろん。あとは俺から説明しても良いか？ ちょっとサポート必要かもしれないから、横にいて欲しいんだけど」

「ああ」

説明……否、証明する為に教壇へのぼる。  
……土屋 康太エロの王者を連れて。

「……………なっ……………!？」

「いいからいいから」

驚いて呆然とする王者の手を引く。正直、中には『兄の手を引く弟』の画に見える人もいるんじゃないだろうか。

「はい、皆さんにクイズですー。この土屋康太君、実は結構すごい人なんです!! なぜだか分かる人っ？」

逃げないように康太の手をがっちり「……………っ!!!(ぐいぐい)」「つかみながら、辺りを見回す。すると一人の生徒が恐る恐る、といった感じで手を上げた。

「アキ、どーぞ」

「えーっと……………、ムツツリーニだから？」

「はい正解。まさしくコイツこそかの有名な寡黙なる性識者、ムツツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニという単語に、クラスメイトからちらほらと驚きの声が上がられる。ま、みんなが驚くのも無理はないだろ。

土屋康太という個人名自体はさほど有名ではない。だけど、ムツツリーニという渾名あだなになると話は別になる。その渾名は、男子生徒からは畏怖と畏敬を、女子生徒からは軽蔑をもって挙げられるんだ。

もっとも、ただのムツツリスケべなんだけど。

「みーちゃんの事は説明する必要はないだろ？ みんなも戦力は十分知ってるはずだし」

「えっ？ ……わ、私ですか？」

「うん。ウチの主戦力だからね。期待してるよ、みーちゃん」

「……………はう……………／／／」

元々Aクラス次席ほどの実力を持つみーちゃん。Fクラスの中ではおそらく、いや絶対にブッチギリの点数を誇っている。試召競争が開かれれば、みーちゃんは勝利への扉を開く鍵になるはずだ。

『そつだ、俺達には姫路さんがい（殴）』

『彼女こそ真の女神（蹴）』

『結こん（血痕）』

(り、鈴音？ こいつらも戦力なんだぞ？ 潰してどーするんだ)

戦力？ なにそれオイシイの？

「なお、俺のみーちゃんに手エ出すような下衆野郎は冊原鈴音の名の下に遠慮なくブツ殺すんで」

三体の死体の小山に立ち、とびきりのスマイル。ただし放っているのはほんわかした物じゃなくて純粹な殺気だけ。

「ごほんっ……、話が逸れたな。鈴音もその辺にしとけ。ウチのクラスには、木下秀吉だっているんだ」

いきなり名前を呼ばれ、困ったような顔で手を振る秀吉。学力はそれほどでもないけれど、部活の事とか双子のお姉さんの事であればかなり名を馳せている。

『おお……！！ 美少j(殴)』

『付き合ってたd(蹴)』

俺の友達たちに手を出すなど、言語道断！！

「当然俺も全力を尽くす」

『代表だし、なんかやってくれそうだな』

『小学校の頃神童だったらしいし』

『つてことは、本来は学力すげーって事か？』

『これなら出来るかもしれぬ』

徐々にクラス中の士気が上がる。うん、これならいけるかもな。

「それに、吉井明久・冊原鈴音コンビだっている」

.....  
なんでココで俺等の名前が挙がるんだ？

『おいおい、冊原と吉井って有名な問題児コンビじゃなかったっけ？』

『しかも二人そろって観察処分者だとか』

『事あるごとに問題を起こしてるらしいぞ』

『片割れは世にも珍しい男娘だし』

「「何でココで僕等の名前を出したの!? ねえ!?!」」

「はっはっは。鈴音、興奮すると僕って言うの、変わってないな」

「いまはそういう問題じゃない!?!」

士気もいまいち下がっちゃってるし!! これは本当に最悪なパターンだ!!

「お、俺は一応現国と化学は点数取れてるし? 戦力になるし? 別に戦力外じゃないしっ!?!」

「りん!!! 僕だけ戦力外みたいな言い方やめてよ!!! 第一りん、英語が零点だったじゃないか!!! 僕は零点なんてひとつもないよ

「!!」

「んな……っ!! あれはちょっとしたミスをしちゃっただけで!  
! 本来なら十点ぐらいは取れてたはずなんだ!!」

「へえ……一体どんなミスをしたのさ?」

「名前を間違えて書いただけだ!!」

R i n n e S a k u h a r a

x r i n e s a k u h a r a

『『バカだ!! コイツとんでもなくバカだ!!』』

「……………(グスン)」

「ほら、皆りんのほうがバカだっていつてるよ!!」

『『お前も同レベルだよ!!』』

「……………(グスン)」

どっちがバカかなんて、人の前でケンカするモンじゃないって事を学習した。

「……………あー、とりあえず、だ。まずは手始めにDクラスを征服する。みんな、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だ!!』

「「とーぜんに決まってるだろ!!」」

この恥辱、絶対に晴らす。人間、学力なんかカンケーないんだ!

「ならば全員筆<sup>ペ</sup>を執れ!! 出陣の準備だ!」

『おおーっ!』

「俺達に必要なのは卓袱台じゃない、Aクラスのシステムデスクだ  
!!!」

『おおーっ!』

「そこでだ明久。お前にはDクラスに宣戦布告の使者になってもら  
う」

おそらくそれは使者ではなく死者だ。

「……絶対酷い目にあうよね? そうだよな? それにりんは?  
僕に頼むならりんにも」

「鈴音には別の役がある。だからお前一人で行っつてこい。大丈夫、  
奴等はお前に危害を加えたりしないから」

……俺に役? 雄二は何を頼んでくるつもりなんだ……?

「そっか。うん、じゃあ、行って来るよ!」

「アキ、逝ってらー」

「うん。……うん？」

首をかしげながら宣戦布告に行くアキ。健闘を祈るとしよう。

えーと。

「で、雄二。俺に頼み？」

「ああ。お前には、あいつ等のうちの一人、誰でも良いから連れてきてくれ。本当なら全員来てくれれば景気付けになるんだが、ルーだからな。それにお前、あいつ等と相当仲いいから。向こうが来てくれるかどうかは、向こうの自由だし」

「了解。出来れば誰がいいかとか、ある？」

「それは特にないな」

「ん。じゃ、行って来る」

俺は軽く手を振りながら教室をあとにし、『ある場所』に向かうことにした。

**第四問 男娘と代表と勝てる理由へワケ**（後書き）

ちよつとオリ設定、オリキャラ降臨です

## 第五問 男娘の部活は創作部（前書き）

今回、オリ設定&オリキャラ回です。  
なんか、うんうん、って感じですよー。

## 第五問 男娘の部活は創作部

文月学園にある部活動の中に一つ、たった一つだけ運動部にも文化部にも属さない部活動がある。

その部活は、ある時にはオリジナルの競技を『創作』し、それを実行。またある時には歌を『創作』し、それを実際に歌う。他にも料理や小説、小物など、色々な物を『創作』してその人の想像力を高める部活、『創作部』。

……という名の、暇人部。不思議なことに暇人部に顧問はいない。俺はそんな暇人部に属しているわけだ。

そんな創作部に入っている俺を含んだ4人のうち、3人はちよつと変わっている……決して人として変わっているという訳ではない……一人を除いて。

「うーっす」

授業中なのになぜか開いている部室に入ると、案の定部員全員、俺以外の3人が揃っていた。

「や、りおん」

「あ、りおんさんじゃないですかー」

「……………」

りおん、と言うのは俺がこの部活で小説とかを書いたりする時に

使っているペンネームとか言うやつだ。

部活のメンバーからは、この名前で呼ばれている。あだ名ってトコかな。

それはまあいいとして、李緒と結夏は返事してくれたけど、尋からの返事がない。いつもは口数多いのに……まさかこいつ、また機嫌悪くしてんのか？

「どしたん鈴音？　こんな時間に」

「あー。代表がさ、景気付けに『手札』を使いたいんだってさ」

「……………（ピクッ）」

手札。試召戦争を行うクラスが試召戦争一回につき一回だけ使える特別ルール。

このルールを使えば、いくつかの厳しい規則があるが、参加しているだけでも強い力となる助っ人が仲間になる。

手札の人間は特別生として入学していて、何処のクラスにも属していない。

特別生は、他の学校という特待生がちょっと特徴的になった版みたいなものだ。全ての強化のうち、2つ以上にずば抜けた能力を持った者、まー1000点ぐらいかな？　を取れて、尚且つ中学の時に発明や発見などの功績を残している者にその資格が与えられる。

特別生となった人間には、受けなければいけない授業数の半減、自由な召喚許可、フィードバックなしの物理干渉など、さまざまな特典もついてくる。

もつとも、召喚獣で意図的に人に危害を加えるとか、そういう問題を起こした時は特別生の資格を剥奪されるみたいだけど。

簡単に言えば、特別生＝ある道のスペシャリストだ。

特別生は文月学園が始まって以来、三人しかいないらしい。俺の部活メンバーで友達の中伊<sup>ナカイ</sup> 李緒<sup>リオ</sup>、黒菜<sup>コクナ</sup> 結夏<sup>ユカ</sup>、村田<sup>ムラタ</sup> 尋<sup>タスネ</sup>の三人が、その三人の特別生だったりする。

李緒は名前こそ女子っぽいけど、格好良くて長身な男子だ。女子から絶大な人気を誇っているが、本人は対応に困っているらしい。しっかりしていて、創作部<sup>ひまじんぶ</sup>の部長も勤めている。得意な科目は英語と古典で、それぞれ1500点位取っている。試召戦争の点数となる他の9教科もそれぞれ140点ほど取っている。総合点数ではAクラスの代表といい勝負だろう。

結夏は綺麗で髪の毛の長い女子。性格もなかなか格好良くて、女子からは友達的な意味で、男子からは好意的な意味で好かれている。一人称が『ボク』のところも、男子から人気がある一因の様だ。得意教科は音楽と数学で、やはりそれぞれ1500点ほど。音楽は試召戦争の点数に入らないけど、他の教科は200点前後と高得点は記録している。Aクラス平均以上の戦力がある。

……で、問題なのが尋だ。見てくれはそれなり、セミロングよりもちょっと短い髪をハーフアップにした男子だが、なぜかいつもニット帽をかぶっていて、その上性格は不思議君とか電波とかそういう感じだ。

一応得意科目を挙げてみると科学と美術で、しかも2500点以上というんでもない数字をたたき出しているのだが、美術は試召戦争の得点にはならないし、どんなこだわりがあるのかは全く分からないけどそれ以外の科目を全て落書きで埋めて提出した為、総合得点は2500点そのままだ。

「りおんさーん」

「お？ おお」

「りおんさんの言ってる事が本当だとすると、ボク達の誰か一人は、試召戦争に参加できるのですか？」

「嘘言ってるから。代表は、手札カードなら誰でもいいってってるんだけど。出て」

「……………じゃんけん」

なぜかいきなり尋がじゃんけんを仕掛けてきた。機嫌悪い時は何かを仕掛けてくるのが突然なんだよな……………。

「「ぽん」「」

俺 チヨキ

尋 グー

「俺の負けか」

「……………(にやり)、(ちよいちよい)」

尋は勝者の特権だと言わんばかりに、にやけた顔で向こうにある飲み物『焼き芋風味の味わい深いソーダ』を指差した。持って来いってことか。

それはいいんだけどさ……………いつつもこんなばっか飲んでるけど、美味しいのか、これ？ 焼き芋もソーダも好きだけど、なあ？ ……飲んでみるか。

ゴクゴク

「……………？ りおん、何で僕のじゅーす飲んどの？ まあ、いいけど。それ美味しいよね」

「……………、お前よくこれ飲めるな……………」

焼き芋の甘ったるさとかドロツとした舌触りとかとかソーダの甘みとかがごちゃごちゃに混ざってプチプチしてて、正直……………すぐにもトイレに行きたい。

一体こんなの何処で売ってるんだよ？

「りおんの口には合わなかったみたいだね。口直し……………のむ？」

そういつて手渡されたもの……………すーぷかれーじゅーす（尋の手書き）。

「遠慮、しとくわ」

「おいしいのに……………」

おいしそうに焼き芋ソーダを飲み干していく尋。いや、そうやって美味しそうに飲まれたって、味を知ってしまったらどうしようもない。

「つかさ、りおん。お前俺等の内、誰を連れて行くつもりなんだ？」

「んー、正直点数的に来て欲しいのはお前んだけどさ、一回手札カードとして参加させた人って、1ヶ月間は味方に出来ないじゃん？ だからな……………今回の相手はDクラスだし……………だけどパーツとけ散らせば景気付けになるだろうし……………うーん」

手札カードつツールもなかなか頭使うよな……。

「んーじゃあじゃあ、僕が行きたい。この中では一番てんすうが低いし」

「えー？ だけとお前、科学の他は点数ないじゃん」

「ダイジヨウブーダイジヨウブー 今からささつとテストしてくるからー。一個のテストじゅっぶんぐらいでいけば、90分でおわるし。数学と社会系以外は、きつと100点ずつ位取れるから」

「数学と社会系は？」

「ん？ つとね、ひとケタ？」

一桁？ 一桁で、なんやねん。

「うー……ちゃんとテストやるんだぞ？」

「うんっ！ー！」

「……よし。結夏、李緒。尋連れてっていいか？」

「えー？ ボクが行きたかったです」

「まあまあ結夏。これから先出番きつとあるはずだし、ここはタズネに任せたって事で」

「うーん、わかりました。その代わり尋、ちゃんと殺ッテ来ルンデ

「スヨ……？」

「は、はい分かりました結夏様。すみませんでした、はい」

結夏は憂さ晴らしが出来なかったのが残念なのか、怒りの矛先を尋に向けていた。いくら怖いもの知らずの尋でも、怒った時の結夏と李緒は怖がるんだよなあ。

「ほら行くぞ、尋」

「はい、わかりました、はい」

「おいおい、動きがカクカクしてるぞ……？ 大丈夫なのか？」

毎度の事ながら異様に怖がる尋を連れて、俺は部室を後にした。

**第五問 男娘の部活は創作部（後書き）**

ご意見感想その他もろもろココロよりお待ちしています!!

オリキャラとオリ制度とオリ召喚獣（紹介）（前書き）

語呂わるww

## オリキャラとオリ制度とオリ召喚獣（紹介）

### 特別生編

#### 特別生ノ資格

- 一、新入生テストで二教科1000点以上（召喚獣対応教科かは問わない）
- 一、高校入学前に何かしらの功績を持っている

#### 特別生ノ特典

- 一、受けなければならない授業の半減（無論授業も特別講師）
- 一、召喚フィールドの自由化
- 一、フィードバックなしの物理干渉
- 一、教師の代わりに授業を受け持つ事が出来る（やりたければ）

#### 資格剥奪

- 一、召喚獣で故意に人を傷つけた場合（退学）
- 一、何らかのズル（カンニングなど）が見つかった場合
- 一、テストで1000点を下回った場合

## オリキャラ編

名前：中伊<sup>なかい</sup>李<sup>りお</sup>緒

性別：男

誕生日：6月 21日

年齢：17

身長：182?

性格：しつかり者。みんなをまとめたりするのが得意。女子から絶大な人気を誇っているが、本人はどうしたらいいのか困っている。クールだが、アニメなどが好き（普通に）だったり、意外な一面もある。

容姿：かなり格好いい。ダークブルーの切れ長の瞳と髪を持つ。髪はショートカットで、若干外ハネがある。

備考：創作部部长

得意教科：実技の体育、保健体育（体育問題）、英語

趣味：読書、音楽を聴く、運動

苦手なもの：人混み

召喚獣装備：黒い武道着に巨大な鎌。武道着は守備力が低いよう見えるが実際は高く、動きやすい。

腕輪能力：時間操作。タイムオペレート。一回につき10秒だけ、自分以外の召喚獣を遅くしたり早くしたり出来る。消費点数は100点ほど。

黒菜 こくな ゆか 結夏

性別：女

誕生日：12月 24日

身長：164cm

性格：性格がイケメンで、友達思い。女子からは友好的な意味で、男子からは好意的な意味で好かれている。だが、スイッチが入ると黒くなる一面がある。李緒と同じで、アニメなどが好きだったりもする。

容姿：灰色がかった茶色の長い髪に、琥珀色の瞳。可愛いというより綺麗な感じ。

備考：他の生徒達曰く、『学園内で一番の歌姫』。後、一人称が『ボク』。

得意教科：音楽と数学

趣味：基本李緒と同じ。+楽器を奏でる。怖いものとかスプラッタ

な物とかが平気だったりする

苦手なもの：特になし

召喚獣装備：合唱団の服装にタクト型のランス。

腕輪能力：指揮妨害

腕輪：少しの間、『敵召喚者の指示 召喚獣の動き』をあべこべにする。消費点数は90位。

むらた たすね  
村田 尋

性別：男

誕生日：4月1日

身長：155cm

性格：電波、不思議君。一体何を考えているのか、仲のいい鈴音たちでも時々分からない。

よく意味の分からない、『尋語』を発する事がしばしばある。こだわりも結構持っているらしい。正直言って、特別生ギリギリの問題児。結構オタクだったりもする。

容姿：容姿はそれなり。なぜかいつもニット帽をかぶっていて、セ

ミロングより若干短い栗色の髪をハーフアップにしている。瞳の色は翡翠色。

備考：時々発明をしている。結構すごい。（いろんな意味で）

得意教科：美術、科学

趣味：アニメ、ラノベ、ボカ 系音楽、発明

苦手なもの：漢字、怒ったりスイッチが入ったりしたときの李緒と結夏

召喚獣装備：白衣に刀（『みすていく』らしい）

腕輪能力：爆発

刀で斬った相手の獲物を、さまざまな爆発物に変える。爆発の規模や物によって消費点数が変わる。

オリキャラとオリ制度とオリ召喚獣（紹介）（後書き）

そしてセンスがない！！

ご意見ご感想アドバイス心よりお待ちしております。

第六問 バカと思いとDクラス(前書き)

すみませんでした。

## 第六問 バカと思いとDクラス

「雄二ー、ちゃんと呼んできた？……、おいアキ。大丈夫なのか？  
そんな制服ぼろぼろにして」

教室に帰ると、なぜかアキが擦り傷だらけで制服をボロボロにして転がっていた。

「これが大丈夫に見えるなら眼科に行ったほうがいいと思う」

「俺視力2.0はあるけど」

「そついう意味じゃないから」

あきれたような目で俺を見るアキ。一体何が……って、そう言えば宣戦布告に向かわされてたんだっけ？ それじゃあこんなになつて帰ってくるのは当たり前か。

「サンキューな鈴音。で、誰を呼んだんだ？」

「う、お前がためらいもなく礼を言うなんてなんか気持ち悪いんだけど……。とりあえず、今回は尋のやつを呼んどいた。どうせこれから試召戦争たくさんやるんだし、とりま尋でいいだろ？」

「尋、村田か。まあ、今回はDクラス戦だからな。村田も戦力としては十分すぎるぐらいだし」

尋は手札カードの中では強いとはいえないけど、それはあくまで『手札の中で』の話。俺等普通の生徒達から見たら、尋の属性は天才そのものだ。

……あ、そういうえば手札使っつて相手のクラスに伝えなきゃいけないって決まりがあったような……。

「で、鈴音。悪いんだが、手札の事Dクラスに伝えてきてもらえな  
いか？ 多分お前なら大丈夫だと思う。さすがにいくらお前のこと  
を知らないヤツでもお前の強さぐらいは知ってるだろ」

「俺が強いのかどうかは分からないけど、了解。何回もアキに大変  
な思いさせるわけには行かないしな。アキ、制服直すんだったら俺  
のカバンの中に裁縫セットが入ってるはずだから、自由に使ってい  
いぞ」

「あ、うん。ありがとう」

「じゃ、また行ってくるわ」

「頼んだぞ。これを忘れると即失格だからな」

「鈴音、Dクラスに行くの？ 良ければウチも一緒に行ってもいい  
？」

唐突に、クラスに数少ない女子が俺に声を掛けてきた。

モデル波の体系、大きなリボンで結つてある可愛らしいポニーテ  
ール、活発そうな印象を受ける声。

アキに好意を寄せている少女、島田美波だ。

「美波？ いやいや、万が一の事もあるし。女子にはここで待つて

てもらった方が……」

「女子には……って、鈴音女の子でしょ？ 体格なんかウチよりも一回りも二回りも小さいし。第一、ウチもDクラスに用があるのよ。これをあの子に返さない」と

『これ』といいながら、美波はブレザーのポケットからハンカチを取り出し、ひらひらさせた。

ほのかにい香りを漂わせるハンカチの端に、『Minami・S Mi haru・S』と刺繍が施されている。Minami・Sは美波の事を指してるんだろうけど、Mi haru・Sって一体……？

「じゃあ、俺がそのハンカチをその人に届けるよ。それでいいだろ？」

「うーん……、わかった。お願いしても良い？」

「もちろん。で、誰に届ければいいんだ？」

「たてロールをツインテールにしてる清水美春って子。『島田美波から預かった』って言えば来てくれると思うけど……気を付けてね？」

「？ うん、気をつけるけど……」

美波からハンカチを預かり、俺はDクラスに向かう為再び教室を出た。

「しっつれいしまーす」

『またFクラスかよ。何度も何度もなめやがって』

『しかもこいつチビだし、さっきの吉井みたいにボコして』

サッ

「五秒以内に神に祈りを済ませるか、おとなしくアキに謝りにいくか。好きな方を選ぶ」

Dクラスの中でもガラの悪そうな二人は、静かに頭蓋を掌握され、俺に耳元で生死の選択をささやかれていた。

『ひイツ！？ こ、コイツもしかして男娘ってことで有名な冊原鈴音じゃないか？』

『ま、マジかよ？ あの悪鬼羅刹の坂本と同等の強さって言う、アイツか……！？』

頭蓋イノチを握られながらも、二人が会話をする。  
そんな噂が立ってたのか……どうりで雄二が大丈夫だって言うはずだ。

「冊原君？ 二人にはちゃんと吉井に謝らせるからさ、熊谷くまがいと阪上さかがみを開放して、用件を話してくれると嬉しいんだけど」

「ああ、平賀。平賀って代表だったよな？」

「そうだけど……用件、早くしてもらえるかな？」

「おう。まず一つ目。俺等は、絶対Dクラスにかつ。そして二つ目。今回のFクラス対Dクラスの試召戦争において、我々Fクラスは手札カードである村田 尋を引き入れます」

静寂、そして。

『っは、バツカじゃねえの？ あ、Fクラスなんだから当たり前か』  
『そうだよな。どうせ俺等に勝てねえと思ったからカード使ったんだろ？ ま、たとえカードでも村田なんかつかつたところで勝てるわけがねえ。ホント、Fクラスってクズしかいねえよくペっ』

気がついたら、阪上と熊谷とか言う二人のチンピラは、俺の握力によって見事に伸びていた。

「……………（ギリッ）」

別に、Dクラス自体が嫌いなわけじゃない。Dクラスにだってい

い人はいると思う。Fクラスがクズばかりだったのも認める。実際、俺もその一人だし。

でも、Fクラスにクズが多くても全員がそうってワケじゃない。それなのにFクラスそのものがクズでと呼ばれたと思うと、腹が立って仕方がなかった。

「悪かったね。阪上と熊谷がとんでもない事を言ってしまった。だけど一応言っとくとFクラスより上位クラスの俺らが負ける気はないよ。それだけ」

「……そう、か。邪魔したな。あ、あと、清水っているか？」

「……？ 美春のことですか？」

「これ、美波から預かった。ちゃんと返したからな」

「あ、はい。……？」

ガラッ ……ダンッ！！

Dクラスの引き戸を出来るだけ『静かに』しめる。

「……絶対、負けたくない」

第六問 バカと思いとDクラス（後書き）

感想とか、良ければいただけるとありがたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6799w/>

---

バカと男娘《オトコ》と召喚獣

2011年12月29日16時46分発行